祭り！　　黄鳩少年は全速前進ー婆ＪＯＨＮ2

獄兎ロク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
祭り！　黄鳩少年は全速前進ー婆ＪＯＨＮ２

【Ｎコード】
Ｎ９２０７Ｈ

【作者名】
獄兎ロク

【あらすじ】
全速前進な少年の夏休み最後の日の物語！コメディー以外の要素を一切排した一口サイズの読みきりです。

（前書き）

さあ、祭りだ。

ぶっちゃけ前作の使いまわしが多いです。が、後半は全くの別物でしかも前作を読んでからの方が楽しめる不思議設計。　一言でもコメいただければ嬉しいです。勿論辛口も大歓迎！

ラピュタ、灼眼のシャナ、ポポロクロイス、魔人探偵脳噛ネウロ、ハヤテのごとく、クラナド、Ｄ－ｇｒａｙｍａｎ、崖の上のポニョ、かんなぎ、空の境界、アンパンマン、新世紀エヴァンゲリオン、名探偵コナン、ハウルの動く城、機動戦士ガンダム、スラムダンク、ロザリオとヴァンパイア、銀魂、ケロロ軍曹

がなんか酷い言われようですが気にしないでください。タイトルを思いつくまま並べただけです。

八月三十一日、六時零零分零零秒。起・床！　計画どうり！
ここはどこか？　勿論俺様の部屋だ。そう、この俺　黄嶋・冴に相応しい絶・対・的にエレガントでクリーンなる自室。偉大な両親より与えられたスペースに、純白の家具とシミ一つ存在しない絨毯。神聖なる朝日に照らされたこの空間は正に現代の神殿、そして俺が神！　美しい……。

　フォン、自室の紹介だけでは話が進まんだろう、そろそろ朝の業務をしてやろう。

　予定表によると今日が夏休み最後の日らしいな。行動予定の欄には“お婆様の家へ”課題の欄には“作文、テーマは自分とその周囲”と書かれている。つまり今日でこの“作文”とやらを完遂しつつお婆様の家へ行くプランか。

「ククク……ハハハ、ワーッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハー！」

凡人なら泣き事を抜かすだろう、だが俺は黄嶋　冴だ。“間に合う訳ないだろう”だと？　笑わせるな！　このプランが黄嶋　冴によって設定されたものである以上、“間に合わない”という事態はあり得ない。例え俺が“作文”について何も知らずとも、だ。なら始めるぞ。

「オイ、今何時だと思ってやがんだ！？」

　隣の家から怒鳴り声が上聞こえた。全く……お門違いにもほどがあるわ！　わざわざ六時丁度に起こしてやったというのに。しかも奴は早朝から大声を出して近隣住民に迷惑までかけている。愚かなものだな。

　まぁいい、まずは調査だ。が、貴様らのような凡人とは違い俺は

軟弱なインターネット等は断・固として使わん。俺様には辞典で十分だ。
「オープン！」
“文章をつくること。また、その作った文章”だと？　フゥン、いいだろうわが人生の師である母に助言を求めるとしよう。
　我が両親は名家の出ではないが偉大な人物だ。まぁ当然だ、何故ならこのａｂｓｏｌｕｔｅｌｙな俺様の親なのだからな！
　自室を出て、不落の城塞たる台所へ向かう。おお、さすが我が母。もう朝食の準備に取りかかられている。感・謝！
「おはようございます母上、突然ですが、作文を教えてく……」
「見てわからぬか？　我は今忙しいのじゃ、後にせい」流石我が母上、何と即答。素晴らしい……。
「ありがとうございます母上、朝食楽しみにしてます」
礼を言い、台所を後にする。作文が何かは聞けなかったが、これを書けばいいのだろう。やはり俺様のプランは完・璧！　これを繰り返せば作文とやらの本質も理解できるハズだ。
すると至高のリビングからＴＶの音が聞こえてきた。弟が何か番組を観ているのだろう。
いいだろう、次は弟に聞いてみるとしよう。
「おはよう、早速だが作文を教えてく……」
“波あぁ～～、ずきゅーん、どが～ん！”
　ク、ＴＶごときが俺様の邪魔をするな！
「作文を教えてくれ！」
俺は叫ぶ。たのむ、届いてくれ！
「何だよ冴兄貴、今いいとこなんだよ」
「教えてくれ、さく……」
「うるさい、あれは魔人ブウだよ！　さっさとどっかいけ！」
「感謝する」
ＴＶからまだ“マイティネス”だの“かめハー！”だのが聞こえてきてうるさい。さっさと次へ進むとしよう。さらば、弟よ。

次は誰に聞くべきか。これだけ聞けばもう作文が何か分かりそうなのだが。よし、もうそろそろ起きてくる究極の父上に聞くとしよう。そして“作文”を理解してやろう。

「ククク……」

父上の部屋のドアを思い切り開け、叫ぶ！

「おはようございます父上、作文を教えて下さい！！」

父上は既に出勤の準備を整えていた。

「勿論だぞ！　さぁ、父さんの胸に飛び込んでおいで！」

この瞬間、俺は轟く程グレートでパワフルな感銘を受けた。“勿論だぞ！”だと！？　そして俺は全てを悟った。

凡人なら雷に打たれたとでも表現するのだろう。俺はただこう呟いていた。

「ビューティフォー……」

ただ美しい真理、真実。作文とは“魂の叫び”だ。その人を一言に纏めた言葉、人生の結晶。

「ありがとうございました」

首をかしげる父上に一礼し、部屋を後にする。頬を熱いものが伝っているのがわかった。

「朝ゴハンの前に千代を起こしておいてくれぃ」

後ろから付け足すようにたのまれた。もちろんです、命に代えてでも起こしましょう！

そういえば、姉貴の千代は自室に籠ってばかりだが一応美術大学生だったな。フゥン、いいだろう、美術的人生とやら、聞かせてもらおう。

ノック。返事を待たずドアをぶち開ける。当然だ、奴は今寝ているハズ。返事を待つなど愚の骨頂、全力で突・入すべし！　さぁ、叩き起してやろう！

「これは一体どういうことだ！？」

暗い部屋の中央に姉さんはうずくまっていた。何かを描いているらしい。姉貴の周囲一面に紙が広げられている。

「おはよ〜、冴」
「あぁ、おはよう姉貴。なにを描いているんだ？」
姉さんの目の下には隈ができている。恐らく睡眠を摂っていないのだろう。それだけ今描いているものに情熱を注いでいるということだ。これは……使える！
「これはね……私だけのお城よ。ウフフ……広い庭と見はらしのいい廊下、そしてたくさんの側近が更に多くの従者を引きつれて私に仕えるの。そうそう、庭には動物小屋や池もあるわ。そしてたくさんの部屋で、従者達はより私に仕えるため己をみがくの、ウフフフフ……」
姉貴だけの城。何て壮・大な世界なんだ、デカイ、デカすぎるよ姉さん。
「グレイト……」
「冴にも理解できた？　この絵の中の世界が」
「はい、参考になりました！」
今度も一礼して去る。あぁ、俺は何と素晴らしい家族に囲まれているのだろう。
ただし、あの凡骨兄貴だけは別だ。そもそも俺とヤツには何の関係も無い。親が同一人物、それだけだ。
フン、されど屑と鋏は使いようだ。最後の最も極限な我がお婆様の作文を際立たせるには丁度いいだろう。さぁ、屑の意地とやら、聞かせてみろ！
凡骨の部屋の扉を蹴り開ける。
「好きな言葉は何だ、兄貴！」
兄貴は朝から不機嫌そうだ。フゥン、そんなもの俺には愉快なだけだ！　ワッハッハ。
「あぁ？　んなもん“バイクで行くぜヴェイヴェー、ホウィィルの下敷きにしてやんぜ”に決まってんだろーが」
「フ、邪魔したな」
再び扉を蹴って閉めた。成程、屑なりに精いっぱい生きているらし

いな。悪くはない言葉だ。
そろそろお婆様の家に向かう時間だ。二駅往復分の小銭を持って駅へ向かう。
「省略する！」
お婆様の住む高級マンションについた。フン、省略シーンの中で一つだけ分かったことがある。教えてやろう、それは“このマンションを販売した奴は馬鹿”ということだ。
駅にあったこのマンションの広告には“徒歩で駅から五分”とあった。住所も確認したから間違いではない。
だが実際、この俺様がごく平均的速度で徒歩で所要した時間は“十五分”。故に“このマンションを販売した奴はロクに時計が読めなかった”という結論が導き出される。
む？“駅から五分は実は一五分♪”だと？何のことだ？こんな推理をしている内に目的の階についた。
お婆様の部屋の前に立ち、深呼吸。ノック。扉を開ける。
「お婆様、貴方の願いを拝聴させてくださ……お婆様！？」
何ということか、お婆様は廊下に倒れていた。
「お婆様、どうなさいました？　お婆様？」
駆け寄り、脈を確認する。そのとき、
「願い？　あたしの願いは……せめて短い間でも……」
どんどん声が小さくなってゆく。お爺様の口元に耳を寄せた。
「……じゃ……」
聞いた。確かに聞いたぞ。お婆様の願い。必ずこの御言葉活かしてみせましょう。
「過去を踏み越え未来を掴む！」
誓う。冴の名にかけて。と、その時お婆様の体が動いた。なんと、寝ているだけのようだ。
フ、全く遊び心を忘れない御方だ。ならば手続きや荷造りが必要だろう。お婆様をベッドに運んだあと段ボールに荷物を詰め込んだ。

何？高校生に手続きが出来る訳無いだと？
　造作も無いわ！
※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※
※※※※※※※※※

九月一日

こめこめこめこめおこめこめこめこめおこめこめこめこめおこめこめこめこめこめこめこめ

　ボクはアメリカから来たＪｏｈｎデス。ハロー、イエローモンキーの皆サン。ここはクソ熱い日本のクソ学校デース。信じられマセン。夏なのにアイス食ってヤガール。
　ボクの国はもっと涼しいデス。超クール。雪だって降りマース。オー？
「それじゃ冬寒いだろ」デスって？ＨＡＨＡＨＡ，なにを言ってるんデスカ？
冬は家中廊下も使ってない部屋も全部ＧＡＮ・ＧＡＮに暖房で暖めマス。正直暑いデース。
　だからボクの国では冬にアイスを食べマス。チョーウメー！
ミーティングがあるとかで岡崎センセイがまだ教室にきてマセーン。アウチ！そんなこと言ってたらきやがりマシタ。
　岡崎センセイは中年太りした国語担当デス。つまり日本語、クソ食らえデース。世界では英語しか通用しまセン。だからこんなインチキ言葉意味無いデース！ていうかアメリカが世界で世界はアメリカデス。
　そもそもこのユーラシア大陸の●●ポみたいなちんけな国がアメリカに勝ってるモノなんてありまセーン。
　とか言ってるうちに授業が始まりまシタ。日本のことわざで好きなのありマス。“果報は寝て待て”。グッナーイ皆さん。
「え～本日の授業は、夏季休暇の課題についてですね」

ボクは寝てマス聞こえてまセン。てゆーかボクの眠りを邪魔しないでくだサイ。
「え～まずですね、例として誰か……よし黄鳩君。君の作文ちと読み上げてくれるか」
岡崎センセイは優等生に特別な感情を抱くタイプの教師デス。いつもボクの前の黄鳩クンばかりターゲットにしマス。
しかし今日は黄鳩クンの様子がおかしいデス。いきなり立ち上がってこう叫びまシタ。
「見てわからぬか？　我は今忙しいのじゃ、後にせい！」
どうしたんデスカ黄鳩クン？　センセイはまるで恋人に裏切られらかのような顔をしていマス。ボクもびびって椅子から転げ落ちてしまいマシタ。
“ガッシャーン”
「うるさい、あれは魔人ブウだよ！　さっさとどっかいけ！」
怒られまシタ。凄く怖いデス。でも確かにセンセイは魔人ブウそっくりデス。
センセイはぽけーっとしてマス。余程ショックだったんでスネ。てゆーか黄鳩クンドラゴンボールなんて好きなんでスカ？　ＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡ，信じられまセーン！　オー？
「日本のアニメは世界一だ！」ですって？何を言ってるんデースカ？ラピュタ？シャナ？ポポロクロイス？ネウロ？ハヤテ？クラナド？ディーグレ？ポニョ？かんなぎ？空の境界？アンパンマン？エヴァンゲリオン？コナン？ハウル？ガンダム？スラムダンク？ロザリオ？銀魂？ケロロ？クソくらえデース。いや、観たこと無いですケド。
ボクの国、つまり世界ではアニメはディズニーって決まってマース！
ああ、早くミッキー実写化しねえカナ？リアルグーフィー観テェヨ。なんでドラゴンボールが先なんダヨ？
あ、センセイが立ち直りまシタ。

「……黄鳩君？　君は教師を、人生の師を馬鹿にしているの？」
「勿論だぞ！」
黄鳩クンの一括が廊下にまで響キマス。海も割って突き進みそうな程まっすぐな返事デス。オー、これが侍ソウルってやつデスカ？まさに全速前進。
　センセイはもうパニックジョータイ。
「黄鳩、きみは……きみは学校を何だと思っているのかね？」
「これはね……私だけのお城よ。ウフフ……広い庭と見はらしのいい廊下、そしてたくさんの側近が更に多くの従者を引きつれて私に仕えるの。そうそう、庭には動物小屋や池もあるわ。そしてたくさんの部屋で、従者達はより私に仕えるため己を磨くの、ウフフフ……」
突然黄鳩クンの語気が変わりマシタ。憑かれたように浮言を続けテマス。センセイもボクも言葉が出てきませン。黄鳩クンを止めなきゃいけないって分かってるノニ。
ちょうど5秒経って、センセイはブチ切れまシタ。
「黄鳩、職員室へ来なさい！　今すぐ！　君は小学校一年生で学ぶべきことが分かっていない！」
怒涛の暴言が黄鳩クンに叩きつけらレマス。怒号はきっと隣のクラスの生徒もびびらせたデショウ。
　それでも黄鳩クンは止まらなイ！止まれヨ。
「バイクで行くぜヴェイヴェー、ホウィィルの下敷きにしてやんぜ！」
　センセイの顔が更に怖くなりまシタ。ここはもう教室じゃありませン。閻魔岡崎による処刑場デス。
「優等生だとおもっていたのだがな、黄鳩。残念だ」
　そう言ってセンセイは黄鳩クンの眼を覗き込み、チョークの先の尖ったトコを喉につきつけまス。
「言い残すことはあるか？」

黄鳩クンが真っすぐセンセイの瞳を覗き込みマシタ。そして黄鳩クンの衝撃発言。
「お前と……一緒の家で……暮らしたい」
突然の告白にセンセイの顔がぱっと閻魔から普段の驚いた表情に戻り、ぽっと赤くなりましタ。
そう、国語担当の岡崎好美センセイは優等生に“特別な”感情を抱くタイプの教師デス。
「いいけど……べ、別に勘違いしないでね、君の傍に居たいんじゃなくて……そう、あれよ。自分の家の掃除が面倒なだけなんだから！」
“キーンコーンカーンコーン”
授業の終わりを告げるチャイムは、まさに二人の新しい生活を祝福するベル！
これで大体ハッピーエンドデス。

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

エピローグ

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※
「わぁ、いい天気♪。うふふ、黄鳩君と会うにはぴったりね！　あ、いけないいけない、もう“冴君”って呼ばなきゃいけないんだっけ？たはは」
とっておきの勝負服を着て気分ルンルンな私は岡崎好美、ごく普通の高校生教師。好きな食べ物は水ナス、年齢は４☆歳。体重は内緒＆ａｍｐ；＃９８２５；
「省略するわ！」
３０分かけて冴君の家にたどり着いたわ。でも緊張しちゃってピンポンが押せないの。ガンバレ私、エイ！

“ピーンポーン”
……返事が無いわ。でも中から物音はするの。思い切ってドアを開けてみたわ。そしたら……。
中に居たのは冴君。そして愛おしそうにその腕に抱えているのは……。
新雪のように真っ白な蓬髪、儚ささえ感じさせる程華奢な四肢。対照的に荒れ狂う濁流を連想させる隆起に富んだ褐色の肌。
抱えられていたのは、なんと小柄な女の人だったの！　歳は私より三十か四十位うえってところね。
「どういうことよ冴君！？　他に女がいるなんて！」
なんて叫びそうになったけどこらえたわ。駄目よ私、これは試練、恋の勝負なんだから！
こうして私の夏より熱い秋が始まった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9207h/

祭り！　　黄鳩少年は全速前進ー婆ＪＯＨＮ2

2010年10月8日22時07分発行